

城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 その2

—福井城下の武家地の研究 その23—

伊豆蔵 庫喜*・吉田 純一**

The Change of the Samurai's premises in *Jyonohashi*-area, part2

—A Study on the Samurai's premise of the Fukui Castle Town, Part23—

Kouki IZUKURA, Junichi YOSHIDA

This paper considers the change of the samurai's premises in *Jyonohashi*-area referring to the 'FUKUI JYOKA-EZU'. The west side premises in *Jyonohashi* left the tradesmen ground of SHIBATA Era for the Keicho years and were done allotment of the premises. There were many premises substitutes of the west side premises in *Jyonohashi* soon after 'TADAMASA' migrated to Fukui Castle Town in the beginning of Kanei Era. The allotment of the premises remained its west side premises from Manji 2 till the late Edo period. In the west side premises of the *Jyonohashi*, most premises were samurai residences through the Edo Era. The west side premises were different from the east side, which changed greatly twice after Jokyo 3 and after Kyoho 6.

Keywords : 城ノ橋、屋敷割、屋敷替え、武家屋敷地、町人地、地方地

1. はじめに

本研究は『松平文庫』所蔵の江戸時代を通して武家地の屋敷割や居住者がわかる8図の城下絵図¹⁾を用いて、江戸初期から幕末までの武家屋敷地の変遷について検討する。前稿²⁾では福井城下の中でも特に変動が激しかった城ノ橋地区(以下、城ノ橋)を取り上げ、江戸初期から幕末までの通りや敷地数の推移について報告した。

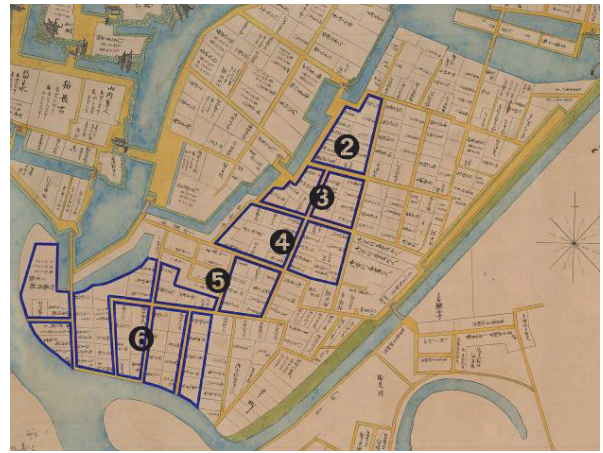
その結果、城ノ橋は慶長18年(1613)までに屋敷割されて東西方向に5筋、南北方向に15筋の通りが設けられていたこと、慶長18年以降の屋敷割は南北方向に敷地が並ぶタテ町型³⁾であったこと、貞享3年(1686)の大法⁴⁾以降に北側から東側にかけての武家屋敷地の大半が地方地に替わったこと、享保6年(1721)以降の松岡藩士の移住⁵⁾で新しく屋敷割された新屋敷町はヨコ町型⁶⁾に変化したこと、敷地数は慶長期の289筆が大法後に一旦は110筆に激減したが、慶応には294筆に戻ったことなどを指摘した。

本稿はその続報で、貞享の大法後に地方地や空き地にならなかった城ノ橋の中央から西側にかけての武家屋敷地、すなわち城ノ橋町や東光寺町、小道具町⁷⁾における江戸初期から幕末までの屋敷割の変化や屋敷替えについて考察する。

* テクニカルサポートセンター ** 建築生活環境学科



1. 慶長 18 年以前(～1613)



2. 万治 2 年大火前(1659)



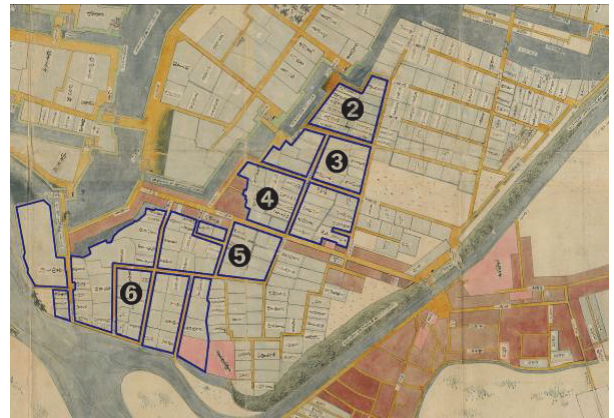
3. 寛文 9 年の大火前(1669)



4. 貞享 2 年(1685)



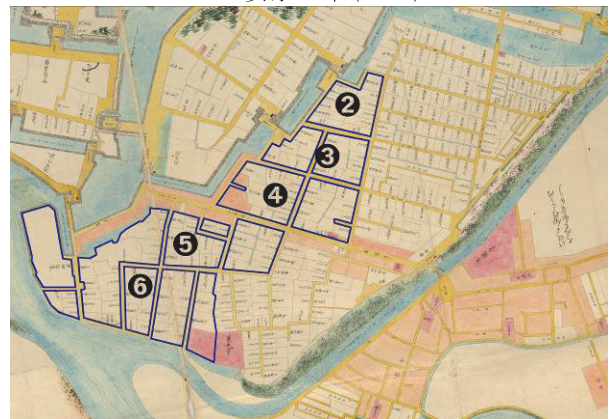
5. 正徳 4 年(1714)



6. 安永 4 年(1775)



7. 文化 8 年(1811)



8. 慶応年間(1865～67)

図1 城下絵図にみる城ノ橋の武家屋敷地 (城下絵図はすべて『松平文庫』より)

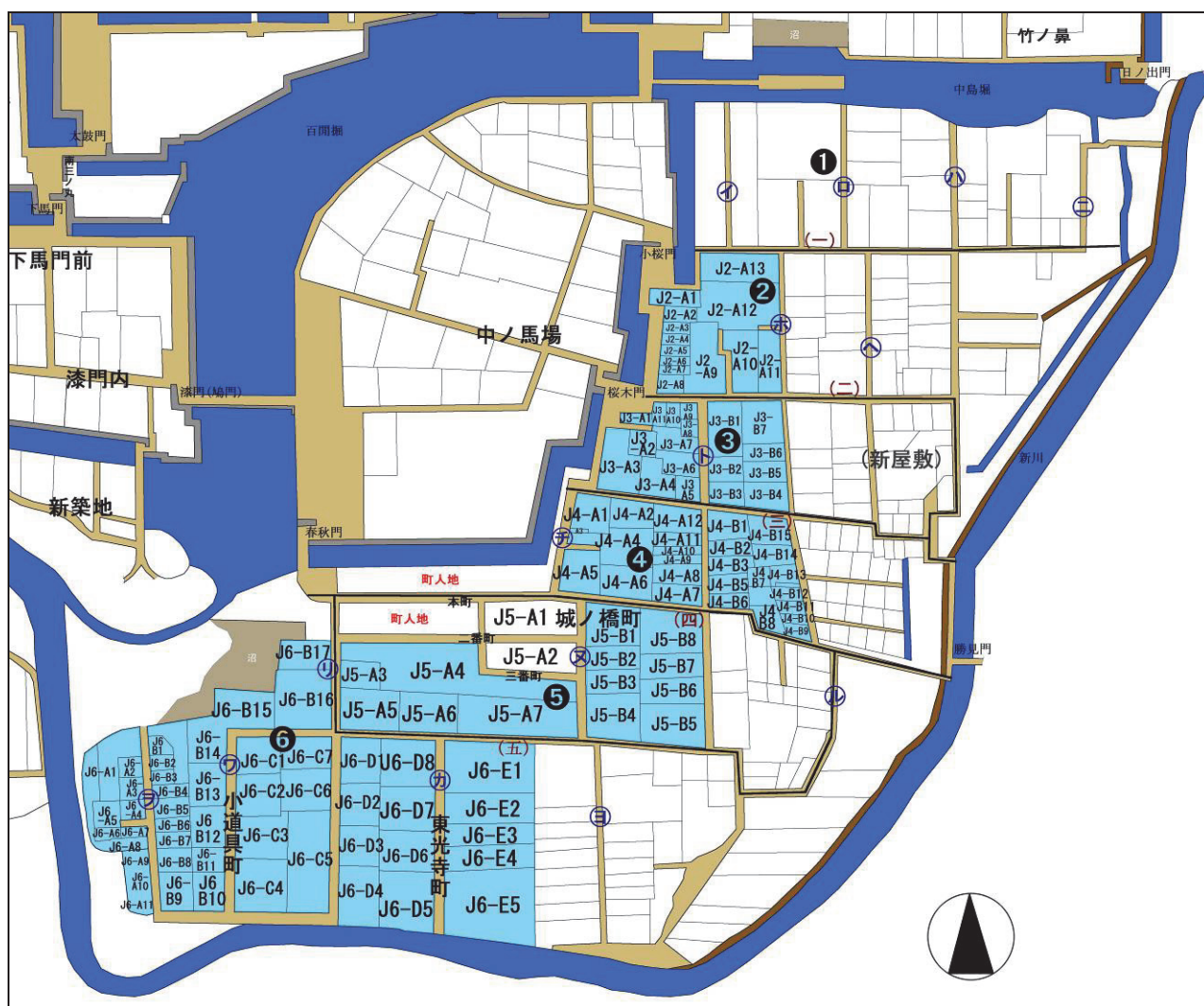


図2 慶長18年以前の城ノ橋の屋敷割

2. 城下絵図にみる城ノ橋の屋敷地(西側)

慶長18年～慶応年間(1865～67)までの8図にみられる城ノ橋の屋敷地を示したものが図1で、これらの屋敷地に記されている居住者や藩役所の変遷を年代別にまとめたものが表1である。

図2は8図のなかで最古の慶長18年以前の『北之庄城郭図』(図1-1)の屋敷割を書き起こしたもので、本稿で対象としている城ノ橋の中央から西側にかけての屋敷地を青色で示し、各屋敷地に記号・番号を付した。図2に付した屋敷地の記号・番号は表1と対応している。なお、表1についても今回対象にする屋敷地は青色で囲んでいる。

本稿で述べる屋敷地は、前稿で区割した②～⑥区の武家屋敷地を5区画に分け、さらに南北方向の通り(①～⑤)を境に西からA～G区の7区に細かく区分した⁸⁾。例えば、J2-A1は②区の西端の屋敷地を指し、J5-B8は⑤区の中央部の屋敷地を示している。

図表に記した地区の番号(②～⑥)や通りの番号(一～五)、記号(①～③)は筆者が便宜上付けたものである。

表1 各時代における武家屋敷地の居住者と藩役所(城ノ橋)

*: 本稿で対象の武家屋敷地 青色, 地方地 黄色, 寺社地 赤色, 河原・沼・畑 緑色, 町人地 赤色

区画	屋敷地番号	年代					正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
		慶長18年 (1613)	坪数 (坪)	万治2年(大火前) (1659)	寛文年間(大火前) (1691~72)	貞享2年 (1685)				
①	S1-A1	杉浦宋十郎 御小人衆	986	空き地 *1 荒川七左衛門 土屋三右衛門 津田源之丞	力中 *2 荒川七左衛門 御中房 津田源之丞	花月与右衛門 津田源之丞 鈴木加兵衛	地方	村上喜内 村口喜作 林 菅田 荒川源六 前田彦次郎 松山利右衛門 波々伯部平六郎 上坂藤太夫	永見 村田 林 菅田 堤 前田 福田 小川 吉岡 武田 武田	永見多門 村田彦衛門 林鉄雄 菅田十左衛門 堤七太夫 前田儀兵衛 福田甚三郎 小川常太郎 吉岡雅能 武田平右衛門 武田三十郎
	S1-B1	藤山小右衛門 御小人衆	990	*1と同じ 空き地 小栗 小寺理右衛門	*2と同じ 鹿立源兵衛 小栗勘兵衛 小寺理右衛門	加藤長右衛門 平塚津右衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-B2	大見彦三郎	828	森宋右衛門 川津十右衛門	森勘右衛門 川津十右衛門	森宋右衛門 川瀬次郎三郎		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-B3	須藤六右衛門	195	桑原小十郎	桑原小十郎	目下部長左衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-B4	御小人衆	54	飯沼官兵衛	飯沼官兵衛	遠藤五左衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-B5	御小人衆		飯沼官兵衛	飯沼官兵衛	遠藤五左衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C1	大見四郎左衛門		野本次郎左衛門	野本次郎左衛門	野本次郎左衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C2	嶋田右京		稲垣安右衛門	山内小太夫 *3	山内小太夫 *3		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C3	大屋源右衛門	364	大町吉左衛門	大町吉左衛門	大町吉左衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C4	矢野五ノ助	392	矢野五ノ助	矢野五ノ助	矢野五ノ助		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C5	木暮金藏	276	加藤弥兵衛	加藤重兵衛	加藤重兵衛		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C6	高菜清右衛門		本庄三右衛門	本庄三右衛門	本庄三右衛門		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C7	幾味庵	320	小笠原理太夫	小笠原理太夫	小笠原理太夫		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C8			荒川清左衛門	荒川清左衛門	荒川三郎太夫		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-C9	小寺国書		稲垣傳七	稲垣傳七	*3と同じ		皆嶋 中村 半井沖庵 加藤長藏 波々伯部 井原丞助 上月久三郎 今村権右衛門	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部	皆嶋次右衛門 中村六三郎 半井仲庵 門野重雄 波々伯部六 岡部養竹 上月操 長谷部
	S1-D1	妹尾清左衛門	121	吉川庄右衛門	吉川庄右衛門	あこ	地方	小川 左衛門	小川	小川六太夫
	S1-D2	岩井喜兵衛	135	吉川庄右衛門	吉川庄右衛門	あこ		小川 左衛門	小川	小川六太夫
	S1-D3	佐久間	110			山中		伴源四右衛門	横井	横井
	S1-D4	矢田四郎左衛門	110	地子		御土屋敷 久味 御土蔵屋敷		平岡平兵衛	村上	村上武右衛門
	S1-D5	長岡新右衛門 同心	231	歎喜院	歎喜院	歎喜院		横井勘十郎	神戸	神戸六左衛門
	S1-D6	長岡新右衛門	540	森勘太夫	森勘太夫	森勘兵衛		片山与三衛門 白山堂	片山 白山堂	片山栄ノ進 白山堂
	S1-D7	長岡新右衛門 同心	200	佐久間猪右衛門 与力・足輕	佐久間猪右衛門 与力・足輕	萩野治郎左衛門		加藤 堀丈左衛門 藤波与八郎 樋口与十郎 多喜田五兵衛 田辺奥右衛門 川崎四郎右衛門	河津 堀 柳下小十郎 平瀬儀次 牧野 田辺 川崎	河津善太夫 堀平太夫 柳下小十郎 平瀬儀次 牧野万右衛門 田辺源太左衛門 川崎久太郎
	S1-D8	赤堀又兵衛	130					吉田源四郎	祐植	祐植常太郎
	S1-D9	田上五衛門	130	松井甚五左衛門	松井甚五左衛門			スズキ末四郎	岡田	岡田丈太夫
	S1-D10	生田善右衛門	130	笠原新五衛門	笠原新五衛門	栗原傳七		加藤 磯野新彦 伊藤勘八 関 林左五太夫 榎硝クラパン	山田 宇佐美 中村 関 岡田 榎硝蔵番	山田延次 宇佐美善平 中村藤次郎 関良太夫 岡田丈太夫 榎硝蔵番 三人
	S1-D11	富岡源右衛門 同心 三十人分		佐久間猪右衛門 与力・足輕	佐久間猪右衛門 与力・足輕	竹沢次兵衛 高橋吉兵衛 中山六之介		スズキ末四郎	岡田	岡田丈太夫
	S1-D12	和田佐右衛門	180	エンセイ蔵		波々伯部角兵衛 与力十一軒		加藤 磯野新彦 伊藤勘八 関 林左五太夫 榎硝クラパン	山田 宇佐美 中村 関 岡田 榎硝蔵番	山田延次 宇佐美善平 中村藤次郎 関良太夫 岡田丈太夫 榎硝蔵番 三人
	S1-D13	富岡源右衛門 同心	392	大井田角右衛門 与力	水野清兵衛	波々伯部角兵衛 与力十一軒		スズキ末四郎	岡田	岡田丈太夫
	S1-E1	岡谷隼人 同心	1200	上月八郎左衛門 与力		日比野七郎左衛門 与力五軒 御中間 五軒 大間助左衛門 与力九軒 大間助左衛門 与力九軒 日比野七郎左衛門 与力五軒 波々伯部角兵衛 与力十軒	地方	（通り）	（通り）	（通り）
	S1-E2	富岡源右衛門 同心	2400	大井田角右衛門 与力		波々伯部角兵衛 与力十軒		（通り）	（通り）	（通り）
	J2-A1	鷹師衆 五人分	280	中野宋太夫	中野宋兵衛	中野惣兵衛		カカ十郎兵衛	岡	岡健藏
	J2-A2	細田甚左衛門	323	大里万右衛門	大里万右衛門	御屋敷		新海助左衛門	金子	金子治右衛門
	J2-A3	戸登半七	224	那須源十郎	那須源十郎	那須治十郎		山田源五左衛門	山田	山田頼之助
	J2-A4	松下仁右衛門	56	那須源十郎	那須源十郎	那須治十郎		嶋津右太夫	島津	嶋津右太夫
	J2-A5	沖次郎兵衛	126	平井源兵衛	平井源兵衛	磯貝市之助		中村市右衛門	岡嶋	岡嶋恒之助
	J2-A6	多力や太学	112	渡十兵衛	渡十兵衛	天野惣八		堀江次郎兵衛	柏谷	柏谷雄藏
	J2-A7	小坂主税	238	築田右太夫	築田右太夫	津田八右衛門		市嶋傳右衛門	市島	市島源五郎
	J2-A8	柳田惣負	140	築田右太夫	築田右太夫	津田八右衛門		石原拾郎	奈良	奈良元作
	J2-A9	鷹匠衆 十九人分		小栗勘太夫	小栗勘太夫	小栗惣太夫		ニツヲ左門	坂野	坂野社九郎
	J2-A10	鷹匠衆		小栗勘太夫	小栗勘太夫	小栗惣太夫		伊藤官兵衛	戸枝	戸枝彦作
	J2-A11	御旗指衆		小栗次太夫	小栗次太夫	嶋田治太夫		高屋 高屋 中村	高屋 高屋 中村	猪子丈右衛門 高屋善ノ丞 中村操
	J2-A12	御鷹師衆		多賀谷三郎左衛門 細仁右衛門 津田新兵衛	多賀谷三郎左衛門 細仁右衛門 津田新兵衛	戸祭儀右衛門 小野傳八 伴治五兵衛		浅井亦右衛門	大道寺	大道寺孫九郎
②	J2-A13	小倉甚左衛門	285	下山五郎太夫	下山五郎太夫	下山半左衛門	地方	嶋川林左衛門	嶋川	嶋川林左衛門
	S2-B1	奥村相ノ丞	340	吉田五右衛門	吉田五右衛門	吉田五左衛門		園田七ノ助	園田	園田豊ノ助
	S2-B2	磯山新右衛門	260	成田五左衛門	成田五左衛門	伴市太夫		ホリイ庄兵衛	岡谷	岡谷弥右衛門
	S2-B3	西川又兵衛	260	岡島加左衛門	岡島加左衛門	岡島権左衛門		伊藤新五兵衛	大久保	大久保二太
	S2-B4	藤田清兵衛	162	藤田清兵衛	藤田清兵衛	下山八郎兵衛		本多忠右衛門	伊藤	伊藤又太郎
	S2-B5	落合庄九郎	252	水野藤右衛門	水野藤右衛門	真杉勘左衛門		山田	山田	山田儀左衛門
	S2-B6	森本吉藏	306	千本弥五左衛門	千本弥五左衛門			河村重藏	河村	河村重藏
	S2-B7	水谷藏部	557	金子市左衛門	金子市左衛門			堀	堀	堀他馬
	S2-B8	花塚源十郎	115	川合四郎左衛門	川合四郎左衛門			サノウチ半兵衛	佐野内	佐ノ内半衛門
	S2-B9	中本新兵衛						藤田傳藏	滝沢	滝沢兵平太
	S2-B10	朝比奈金兵衛 河部勘太夫						田川角左衛門	三沢	三沢勘左衛門
	S2-B11	山上甚左衛門	328	本多武兵衛	本多武兵衛	本多武兵衛		野浅彦十郎	國分	國分三弥
	S2-C1	平賀源左衛門	352	秋間加右衛門	秋間加右衛門	松原清右衛門		一柳	一柳	一柳新九郎
	S2-C2	山源弥一郎	308	戸田六太夫	黒川伊左衛門	江口万藏		高久小四郎	堀	堀又右衛門
	S2-C3		220	海福一郎左衛門	海福一郎左衛門	大宮彦右衛門		跡部又八	堀	堀助左衛門
	S2-C4	館新右衛門	264	馬淵助左衛門	馬淵助左衛門			波々伯部小太夫	堀	堀助左衛門
	S2-C5	東江喜兵衛	264					堀	堀	堀助左衛門
	S2-C6	菅谷小平太	378					堀	堀	堀助左衛門
	S2-C7							堀	堀	堀助左衛門

城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 その2 - 福井城下の武家地の研究 その23 -

	S2-C8						
	S2-C9	戸祭五兵衛		丹波善右衛門	丹波善右衛門	萩野弥左衛門	
	S2-C10	吉田久右衛門	135				
	S2-C11	伊藤清兵衛	374	久世次郎右衛門	久世次郎右衛門	久世市左衛門	
	S2-C12	木科新助	264		富岡平兵衛	留岡次郎太夫	
	S2-C13	間傳右衛門	253		秋本勘之丞	秋元八左衛門	
	S2-C14	石倉勘兵衛	253				
	S2-C15	伊藤宋左衛門		伊藤万右衛門		林成右衛門	
	S2-D1	岡谷佐太夫	1050	松原善右衛門	松原善左衛門	松原吉左衛門	地方
	S2-D2	味名喜之丞	190	向井清兵衛	古川藤左衛門	林十三輔 関権吉	奈良左近右衛門 与力 剣持久右衛門 与力
S2-D3	青木兵新	140	土居多門	土居多門	菅嶋儀兵衛		
S2-D4			千野半右衛門	千野半右衛門	山田又四郎	地方	
S2-D5	堀沢清太夫	144	大関権左衛門	大関権左衛門	大関七郎兵衛		
S2-D6					掃除者		
S2-D7	名山兵右衛門	144	本多五太夫 与力	本多五太夫 与力	石黒源五左衛門 与力六軒	主屋 役	
S2-D8	岡谷隼人 同心	420	本多五太夫 与力	本多五太夫 与力	石黒源五左衛門 与力六軒 石黒源五左衛門 与力四軒	地方	
S2-D9	御中間衆		本多五太夫 与力	御中間	御小道具衆 二軒		
	J3-A1	魔匠衆	(通り)				
	J3-A2	坂本清太夫	324	塩谷五左衛門	塩谷五左衛門	塩谷五左衛門	
	J3-A3	神谷権平次		松江長左衛門	松江長左衛門	出浦四郎兵衛	波々伯部十郎衛
	J3-A4	井口久五郎	300			国枝半兵衛	
	J3-A5	濱野三四郎	289	国枝五郎吉	国枝五郎吉	国枝半兵衛	萩野四郎右衛門
	J3-A6	増物屋甚五右衛門	320				
	J3-A7	野間藤丞	270	海福権兵衛	海福権兵衛	海福勘介	飯嶋長兵衛
	J3-A8	細井五衛門	100				
	J3-A9	木次久太夫	160				
	J3-A10	忍瀬弥太夫	208	国枝市ノ丞	国枝市ノ丞	虎屋七左衛門	
J3-A11	小貴瀬兵衛	52					
J3-B1	小栗市正	630	山川内膳		飯田忠四郎	荒川右衛門太	
J3-B2	小栗茂吉	315					
J3-B3	三宅五左衛門	336	堀十兵衛	堀十兵衛	堀庄介	杉田小平次	
J3-B4	市橋半兵衛	378	宮北六兵衛	宮北六兵衛	宮北七左衛門	宮北七左衛門	
J3-B5	春秋兵庫	299	水野太兵衛	水野太兵衛	斉藤源左衛門	斉藤利右衛門	
J3-B6	秋本与兵衛	253	横山久左衛門		森八郎左衛門	井上源左衛門	
J3-B7	多田茂左衛門	420	長沼権兵衛		長沼権兵衛	長谷川八郎右衛門	
3	S3-C1	堀次郎右衛門	437		田中源五衛門	田中平弥	
	S3-C2	落合四郎右衛門	299	今立六右衛門	今立六右衛門	生田十左衛門	
	S3-C3	山崎小右衛門	322	萩野藤次衛門	萩野藤次衛門	出淵平介	
	S3-C4	牧野傳兵衛	391	杉田次右衛門	杉田次右衛門	横井玄太郎	地方
	S3-C5	加藤小平太	252	山口弥右衛門		高田安左衛門	
	S3-C6	松井勘十郎	180		唐沢市兵衛	増井彦太夫	
	S3-C7	植田孫兵衛	180	伊藤弥五右衛門		柄田丞兵衛	
	S3-C8	坂本喜兵衛	234	小川武左衛門	小川武左衛門	小川藤九郎	
	S3-C9	尾崎又右衛門	288		岩上七ノ丞	津田小左衛門	
	S3-D1		115	伊達勘太夫	伊達勘太夫		
S3-D2		115					
S3-D3		75	岡部左兵衛	岡部豊法	妹尾新七		
S3-D4		95	御菓子奉行	御菓子奉行	庄次安左衛門		
S3-D5		125	御歩行	御歩行	井上久兵衛		
S3-D6	本多太郎兵衛	728	出淵平兵衛	出淵平兵衛	出淵平兵衛		
S3-D7			藤田吉右衛門	藤田吉右衛門	吉沢七之丞	地方	
S3-D8		86			須崎与五右衛門		
S3-D9					伴重右衛門		
S3-D10		80	御奉行 五人	御奉行 五人			
S3-D11		80			梅村七右衛門		
S3-D12					拓木五右衛門		
S3-D13		70	御中間	御中間	中間四軒・掃除者三軒		
	J4-A1	熊井九右衛門	315	山原勘衛門		伊丹五之丞	堀源三郎
	J4-A2	早川喜右衛門	306	宇野長兵衛	宇野長兵衛	川津甚太夫	鈴木玄五右衛門
	J4-A3						
	J4-A4	享石一衣	360	水戸内匠	水戸内匠	水戸平兵衛	水戸一ノ進
	J4-A5						野屋敷
	J4-A6	長谷川宋右衛門		岡部高伯		立岩源八	立岩長右衛門
	J4-A7	須田宋三郎	240	山崎茂兵衛	山崎茂兵衛	廣地新太兵衛	伊黒与太夫
	J4-A8	大藏宮内	208	栗原作兵衛	栗原作兵衛	田中助右衛門	古木八郎兵衛
	J4-A9	多賀谷粉負	176	佐藤与兵衛	佐藤与兵衛	浅井十次郎	真杉勘左衛門
	J4-A10	大嶋忠兵衛	200	真柄庄右衛門	真柄庄右衛門	菅谷左衛門	田代藤元
J4-A11		久嶋茂太夫	久嶋茂太夫	水野彦右衛門	水野三右衛門		
4	J4-B1	荒川傳右衛門	364	野本源五衛門	野本源五衛門	大野又六	溝口一右衛門
	J4-B2	石川又右衛門	325	狩野与次	狩野与次	狩野筑後	狩野奥太夫
	J4-B3	磯治孫右衛門	276	富沢次右衛門	富沢次右衛門	富沢金左衛門	平尾新五兵衛
	J4-B4	大川与兵衛	276	黒板又四郎	黒板又四郎	長野定右衛門	武部新太夫
	J4-B5	神山八左衛門	345	渡部又兵衛	渡部又兵衛	杉本門左衛門	伴新五右衛門
	J4-B6	矢野右衛門佐		* S3-B14と同じ	* S3-B14と同じ	* S3-B14と同じ	
	J4-B7			岡部新左衛門 与力	岡部新左衛門 与力	岡部新左衛門 与力二軒	地方
	J4-B8	横井源五右衛門	320	枅谷半右衛門	枅谷半右衛門	枅谷半右衛門	山中十介
	J4-B9	御乳入	108			武部傳太夫	地蔵堂
	J4-B10	御男	96				
J4-B11	原木九衛門	96	吉池角左衛門	吉池角左衛門	吉池武右衛門	吉池角左衛門	
J4-B12	朝比奈孫右衛門	234					
J4-B13	松嶋四郎右衛門	112	鈴木宋左衛門 *	鈴木宋左衛門 *	鈴木宋左衛門 *	坂田七右衛門	
J4-B14	意休	312	松嶋与左衛門	松嶋与左衛門	川崎三郎助	市村勘右衛門	
J4-B15	青木内蔵助	384	谷崎忠左衛門	谷崎忠左衛門	萩野八十郎	野本玄兵衛	
J4-C1		72			原田源左衛門		
J4-C2		72	御歩行屋敷 五人	御歩行屋敷 九人	吉井太郎左衛門	地方	

イノウエ源左衛門	井上	井上小右衛門
	猪子	橋江大兵衛
	坂部	坂部熊ノ助
	樋口	樋口小左衛門
	原田	原田源左衛門
	久野	久野父四郎
	高屋	高屋権太郎
	永田	永田順右衛門
太久保助十郎	中村	中村若八
ハタノ五郎左衛門	瀧美	瀧美新右衛門
カワ村他一郎	高橋	高橋吉兵衛
長持者部屋	組屋敷	ソイコミ
長持者部屋	組屋敷	ヘヤ
矢島彦四郎	矢嶋	矢嶋忠太
	川合	河合次郎
平井三右衛門	平井	平井弥市
	松尾	松尾新太郎
	木内	木内甚兵衛
	櫻井	櫻井庄九郎
（畑）	矢嶋	矢島惣介
	末松	末松登兵衛
＜通＞		
	久保	大崎七太夫
	河崎	川崎三郎
	下山	下山彦三
	中川	中川金之助
	服部	服部静左衛門
	比企	比企他五郎
	伊藤	伊藤次
	菅沼	菅沼司馬
濱田新兵衛	相沢	相沢入右衛門
藤佐三十郎	菅沼	菅沼兵衛
	斉藤	斉藤平次郎
西屋半十郎	渡辺	渡辺弥ノ介
	辻	飯田主税
	杉山	
	杉坂	杉坂義左衛門
	前波	前波鉄五郎
	近藤	近藤雄雄
（畑）	加藤	加藤牛五右衛門
	松田	松田鉄之助
	大町	大町吉右衛門
	百姓長屋*5	百姓長屋*5
	百姓長屋*5	百姓長屋*5
	小栗	小栗小次郎
ホリ次郎左衛門	岡島	岡嶋清七
	松田	松田藤次郎
	服部	服部弥太郎
	安藤	安藤久蔵
	丹波	丹波喜作
	S3-C7と同じ	S3-C7と同じ
	S3-C8と同じ	S3-C8と同じ
（畑）	平野	平野伸之
	中野	中野鉄太郎
	松本	松本小平太
	山上	
	藤川	矢野小助
	矢野	
	都築	都築利八
吉田伊兵衛	竹沢	山田嘉平
林碩之丞	林	竹沢実吉
	■田	林忠夫
町屋敷	町屋敷	町屋敷
水戸但馬	水戸	水戸但馬
町屋敷	町屋敷	町屋敷
	林	林勘十郎
	伊黒	伊黒弥三左衛門
村田十太夫	鈴木	鈴木藤吉
横田作太夫	彦坂	彦坂次次
柳田源雄	萩野	萩野若十郎
織田仁太夫	加藤	加藤藤左衛門
	片山	片山
ヲヲ甚左衛門	明石	明石雄太郎
	香田	香田敏次郎
鈴木新八郎	岩村	岩村友藏
武部傳太夫	武部	武部作太
吉江助右衛門	益田	益田栄三
了（伊）	小野	小野太郎助
	福蔵院	福蔵院
町屋敷	町屋敷	町屋敷
岡嶋多兵衛	細井	細井玄馬
岩佐長左衛門	小嶋	小嶋逸八
河合源右衛門	引間	引間泰蔵
妙内傳兵衛	竹内	竹内徳之助
並塚与左衛門	並塚	並塚利右衛門

城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 その2 - 福井城下の武家地の研究 その23 -

4	S4-C3		72			喜内治猪左衛門		アイザワ権四郎	高橋	高橋左十郎
	S4-C4		72			山口治太夫			波々伯部	波々伯部太三郎
	S4-C5		72			三村茂兵衛			大木	大木本ノ丞
	S4-C6		104						久津見	久津見九左衛門
	S4-C7		84							
	S4-C8		88			長谷川又左衛門				
	S4-C9		110	御歩行		竹内七右衛門	三村藤兵衛			
	S4-C10	細井彦衛門	56			飯嶋七郎右衛門			山沢五兵衛	小木
	S4-C11	矢部宮内	56			岡部市郎左衛門			イコマ藤右衛門	生駒
	S4-C12	飯野新左衛門・坂本茂兵衛	88	御歩行屋敷 九人	御歩行屋敷 五人	村上太夫			小栗甚兵衛	鈴木
	S4-C13	竹生庄三郎	88			稲村傳兵衛			ハラタ五太夫	土屋
	S4-C14	多賀谷【一ノ丞】	88			松尾門右衛門				青山久太郎
	S4-C15					吉池甚兵衛			町屋敷	町屋敷
	S4-C16	松田七左衛門	80			稲木門太夫			四十間長屋	
	S4-C17	深野喜兵衛	80	御歩行屋敷 七人	御歩行屋敷 七人	樗尾太郎太夫				
	S4-C18	古沢長右衛門	80			久保村治左衛門				
	S4-C19	有田八右衛門	80			田中孫太夫				
	S4-C20	飯野七太夫	80			大谷三太夫				
	S4-C21	大嶽甚十郎	80			長沼彦左衛門				
	S4-C22		80	御歩行屋敷 三人	御歩行屋敷 三人					
	S4-C23	岡本九兵衛	70			三原金右衛門				
	S4-C24	三田弥左衛門	70			富田助右衛門				
	S4-C25		80			山内七十郎				
	S4-C26	藤原頼貞	80	掃除之者	掃除之者	藤田傳右衛門	真杉長右衛門 与力			
	S4-C27	山田半左衛門	80	中山宋左衛門	中山宋左衛門	荒川源右衛門 与力				
	S4-C28	越佐次衛門	80	畑甚五左衛門 与力	畑甚五左衛門 与力	御中間 九軒	武宮権右衛門 与力			
	S4-C29	荒川國書	100			津内治左衛門 与力			郡組	郡組
	S4-C30	御中間衆	900	長濱茂左衛門	長濱茂左衛門					
				長濱茂左衛門 与力	長濱茂左衛門 与力					
5		町屋敷		町屋敷	町屋敷	町屋敷	町屋敷	S6-G	町屋敷	町屋敷
	J5-A1	町屋敷		町屋敷	町屋敷	町屋敷	町屋敷		町屋敷	町屋敷
	J5-A2	町屋敷		町屋敷	町屋敷	町屋敷	町屋敷		町屋敷	町屋敷
	J5-A3	高田平右衛門		畑久右衛門	畑久右衛門	京新五右衛門	末新五右衛門		大藤三郎	大谷
	J5-A4	町屋敷		町屋敷	町屋敷	小倉重左衛門	小倉八郎右衛門		雨森	雨森儀右衛門
	J5-A5	朝倉造酒	450	大野六左衛門	大野六左衛門	味岡彦八	加賀		真杉勘右衛門	加賀九郎兵衛
	J5-A6	友松平助	475	松崎安兵衛		伊藤傳右衛門	伊藤傳右衛門		鈴木市太夫	栗崎
	J5-A7	磯野喜左衛門	528	多賀谷次郎右衛門	多賀谷次郎右衛門	土方源右衛門	雪吹斗兵衛		高嶋喜兵衛	高嶋
	J5-B1	岩上大膳	390	日比金太夫	日比金兵衛	畑牛ノ丞	井原助左衛門		笹倉弥左衛門	笹倉
	J5-B2	奈須新兵衛		松沢八左衛門		堀江源右衛門	八木重六		笹倉	笹倉
	J5-B3	大野与左衛門	270	里村庄之助	里村庄之助	矢沢左太夫	矢沢左太夫		笹倉	笹倉
	J5-B4	村松五太夫	486	鮎九郎右衛門	鮎九郎右衛門	田代義元	田井藤兵衛		宮下平四郎	宮下
	J5-B5	木工勝蔵	325	藤田彦右衛門	藤田彦右衛門	平野玄葉	羽中田新七		雨森源兵衛	西尾
	J5-B6	永田四郎兵衛	275	桜井傳右衛門	桜井傳右衛門	坂田助右衛門	坂田助右衛門		坂田助右衛門	坂田
	J5-B7	朝倉造酒丞	300	松山道甫	松山道甫	石川忠右衛門	石川忠右衛門		坂田助右衛門	坂田
	J5-B8	比企次郎右衛門	138	河田角兵衛	河田角兵衛	石川忠右衛門	石川忠右衛門		坂田助右衛門	坂田
	S5-C1	戸祭庄九郎	311	本江左助	本江左助	木内甚兵衛	川崎三郎兵衛		上條三郎衛	大久保清衛門
	S5-C2	飯嶋次右衛門	460	下山半太夫	下山半太夫	高橋金左衛門	松山治五太夫		南部	南部源次
	S5-C3	石川勘助		築吉左衛門	築吉左衛門	松沢勘太夫	松沢勘太夫		松沢勘太夫	大久保
	S5-C4	今井平兵衛		御歩行	御歩行	志村仙介	木澤利右衛門		寺沢	岡田弥一郎
	S5-C5	木内与五衛				鮎重左衛門	鮎重左衛門		岡田	浦井
	S5-C6	岡部太郎衛				飯川彦兵衛	岩村門右衛門		浦井	味岡
	S5-C7	田沼新蔵				櫻井傳右衛門	櫻井傳右衛門		味岡	味岡彦八
	S5-C8					磯部金兵衛	古沢藤四郎		多田	多田松五郎
	S5-C9			戸祭兵太夫	戸祭兵太夫	松山吉右衛門	瀬尾喜兵衛		福山	福山金十郎
	S5-C10	浅羽左衛門	630						久野	久野二郎太
	S5-C11	柳田一兵衛							町屋敷	町屋敷
	S5-C12	秋藤二郎兵衛		吉田作右衛門	吉田作右衛門				堀	羽中田鉄五郎
	S5-C13	田沼勘十郎							羽中田新五右衛門	羽中田
	S5-C14	小倉弥五左衛門				大井田新九郎			高木万ノ助	高木
	S5-C15	波々伯部喜左衛門		御歩行 六人	御歩行 六人	篠田太郎太夫			高木	川村隆輔
	S5-C16	鯉九兵衛							川村	川崎
	S5-C17	亀井長右衛門							川崎	川崎三郎
	S5-C18	一瀬新右衛門							ナカ山五郎左衛門	中山
	S5-C19	早川京助		掃除之者	掃除之者				横山	横山吉太夫
6	J6-A1	《畑》						S6-G	織田	織田新左衛門
	J6-A2		105	加藤内膳 下屋敷	加藤内膳 下屋敷				福嶋	福嶋長左衛門
	J6-A3		135	海福清右衛門 与力	海福清右衛門 与力				岡	岡作太郎
	J6-A4		90	加藤内膳 与力	加藤内膳 与力				加藤	加藤丈太
	J6-A5		135	高橋金左衛門	御着貫良 高橋金左衛門				長谷川武左衛門	長谷川
	J6-A6		120	堀彦左衛門 与力	多賀谷三郎左衛門 与力				黒沢半兵衛	黒沢
	J6-A7		113	多賀谷三郎左衛門 与力					ツタ久左衛門	狩野
	J6-A8		152	加藤内膳 与力					岸田彦兵衛	勝山
	J6-A9		120						勝山	勝山唯一
	J6-A10		195	加藤内膳 与力					町屋敷	町屋敷
	J6-A11		43	須藤 与力					町屋敷	町屋敷
7	J7-A1							S7-G	芦田下野	芦田
	J7-A2								《畑》	徳山唯一
	J7-A3								加藤通安	東方
	J7-A4								高江彦四郎	徳山
	J7-A5								徳山	徳山三左衛門
	J7-A6									
	J7-A7									
	J7-A8									
	J7-A9									
	J7-A10									
	J7-A11									

城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 その2 - 福井城下の武家地の研究 その23 -

[illegible]

3. 各時代における城ノ橋の屋敷地(西側)の様相

3.1 慶長18年以前(図1-1)

慶長18年以前の武家屋敷地は通り沿いに配され、南北方向に屋敷地が並ぶタテ町型である。城ノ橋の西側の屋敷地は、**②**区が13筆、**③**区が18筆、**④**区が26筆、**⑤**区が12筆、**⑥**区が49筆で、5区全体で108筆ある。これらの坪数は100坪代が20筆で最も多く、次いで200坪代と300坪代がともに19筆ある。しかも、200坪以下が29坪あり、近隣の天草町や永平寺町の屋敷地と比べても小さめである。500坪を超えるのは8筆のみで、最大は786坪である⁹⁾。

居住者をみると、**②**～**⑥**区とも屋敷地の大部分を武家屋敷地が占めている。しかし、**②**区の5筆(J2-A1・A9～A12)と**③**区の1筆(J3-A1)は鷹匠衆や餌指衆の屋敷地である。一方、**⑤**区の北側は町人地(J5-A1～A2・A4)がみられる。藩祖秀康による城下建設の際、町人地はすべて外堀の外に移しているが、ここは町人と農民が混在していた柴田時代の城ノ橋村の一部が残ったものである¹⁰⁾。

また、**⑥**区の西端は河原や沼が広がっており、さらに西側の屋敷地(J6-A1～B10)のほとんどが畑や空き地である。したがって、**⑥**区の西側一帯は、慶長18年時にはまだ居住区として整備されてなかった可能性が高い。

3.2 万治2年大火以前(図1-2)

万治2年(1659)の大火前の図1-2をみると、敷地の大きさや形状にバラツキがあった**②**区と**③**区の屋敷地はほぼ均等になり、5区全体の通りや屋敷割も整備されている。特に**⑥**区の西端が大きく変わり、慶長期の河原や沼地が通りや屋敷地になったのをはじめ、畑(J6-A1)や空き地(J6-A2～J6-B10)が合筆して武家屋敷地になっている。屋敷割の変化は、他に**③**区の10筆(J3-A4～J3-B2)や**④**区の4筆(J4-B9～B12)がそれぞれ隣地と合筆したように、**②**～**⑥**区においても合筆が多く、敷地数も100筆に減っている。

慶長18年以降の屋敷替えは、5区全体で94件あり、**②**区(12筆)と**③**区(11筆)はすべての居住者が替わっている。なかでも**②**区のJ2-A1・J2-A9～A12と**③**区のJ3-A1に住んでいた鷹匠衆や餌指衆は万治2年の大火前までに城下東北隅に成立した鷹匠町や餌刺町に移ったと思われる¹¹⁾、その跡は中野宋太夫や小栗勘太夫ら6士の屋敷地になっている。**④**区と**⑤**区の屋敷替えの大半が武家同士のものである。但し、**⑤**区の北側にある町人地(J5-A1～A2・A4)は慶長期の状態のまま存続しているが、町名が本町から長濱町に変わり、範囲も漆ヶ淵付近まで延びている¹²⁾。

屋敷割の変化が激しかった**⑥**区は38件屋敷替えしている。慶長期は空き地が目立った西側一帯は、新たに屋敷割されて上級武家屋敷や与力屋敷になっている。このうちJ6-A1～A3の加藤内膳(後、芦田と改姓)は福井藩の最上級家格の高知席を勤めており、『続片聾記(上)』¹³⁾に本丸の南側は足羽川しかなく防備が手薄であったため、加藤家の初代康寛が2代藩主忠直に願い出て、この場所を屋敷地として拝領したことが記されている。一方、東端にあった小山田多門の屋敷跡(J6-E5)は東光寺になっている。東光寺は寛永元年(1624)に3代藩主となった忠昌が越前転封の際、越後高田から移築させた寺院であり¹⁴⁾、後に町名の由来にもなっている。

3.3 寛文9年大火以前（図1-3）

寛文9年(1669)の大火前の屋敷割は図1-3でわかる。万治2年の大火以降、寛文9年の大火前までに⑥区で合筆が2筆、分筆が1筆あるだけで、敷地数は先の万治2年時より1筆減っている。

図1-3は居住者を示す付紙が剥がれている屋敷地が多いが、④区と⑥区がともに1件ずつ屋敷替えしている。④区のJ4-A6は岡部高伯から地方地に替わっている。貞享3年の大法以前に武家屋敷地のなかに地方地が置かれた例は、これまでみてきた城下中心部の大名町や南三ノ丸はもとより城下周辺部の天草町や餌指町においても確認できない¹⁵⁾。

3.4 貞享2年（図1-4）

貞享2年(1685)の絵図をみると、⑤区は慶長以来、西側にあった町人地の一部(J5-A2・A4)が武家屋敷地に変わり、⑤区の屋敷割が多少変化している。特に⑤区の町人地の二番町と三番町の間にあった通りも取り除かれている。これに伴い、②～⑥区とも武家屋敷地の占める割合が多くなり、敷地数も103筆に増加している。

寛文9年の大火後～貞享2年の間の屋敷替えは、5区全体で64件ある。やはり武家同士の屋敷替えが中心であるが、⑤区の西側にあった町人地J5-A1の一部とJ5-A4～A5が京新五右衛門や小倉重左衛門など8士に与えられている。さらに寛文9年の大火前までに地方地になった④区のJ4-A6が再び武家屋敷地に戻っている。また、⑥区は西端にあった7筆の武家や与力屋敷(J6-A1～A11)が2筆に合筆し、芦田内匠(J6-A1～A5)と川端御茶屋(J6-A6～A11)になっている。逆に東端のJ6-B10は藩の道具衆の屋敷地が配されている。なお、町名にもなっている小道具方の屋敷地の位置(J6-B10)は江戸後期まで変わっていない。

3.5 正徳4年（図1-5）

既報のように、貞享3年の大法後に城ノ橋の北側や東側の武家屋敷地はすべて地方地に一変し、南北方向の通り6筋が取り除かれている。これに対して、西側の屋敷地は屋敷割や通りは貞享2年時とほとんど変わっていない。この状況は正徳4年(1714)の図1-5でも確認できる。但し、④区で合筆が1筆、⑥区で分筆が1筆あり、敷地数は貞享2年時より1筆減少している。

貞享2年～正徳4年の間の屋敷替えは68件あるが、④区のJ4-A3とJ4-A5の2筆が町人地に、J4-B6・B7が地方地に替わっただけで、それ以外はすべて武家同士の屋敷替えである。前述のように、城ノ橋の東側はこの時期、武家屋敷地の大半が地方地に替わっている。しかし、西側の②～⑥区にある武家屋敷地は、貞享3年の大法後も変わらず同じ位置に存続している。

3.6 安永4年（図1-6）

安永4年(1775)の②～⑥区の西側の敷地数は106筆で、正徳4年時より4筆増えている。これは正徳4年までに4筆(⑤区で1筆・⑥区で3筆)が分筆した結果である。

図1-6も寛文9年の図1-3同様、居住者を示す付紙が剥がれている屋敷地が多い。居住者が判るものでは、②区のJ2-A1が中野治五右衛門から山田源五左衛門になるなど、②区で6件の屋敷替えがみられる。③区は11筆中9筆の付紙が剥がれているが、J3-B3の杉田小平次が濱田新兵衛になるなど3件で居住者が替わっている。

それ以外は、④区は3筆、⑤区は10筆、⑥区は7筆の居住者が特定できないが、④区のJ4-A1が堀源三郎から吉田伊兵衛に、⑤区のJ5-B3が志村仙介から木滑利右衛門に替わるなど④区で14件、⑤区で8件、⑥区で18件の屋敷替えが確認できる。

3.7 文化8年（図1-7）

図1-7で文化8年(1811)の屋敷割は安永4年とほぼ同じであるが、西側の屋敷地は安永4年～文化8年の間は分筆が多く、敷地数は113筆に増加している。

安永4年以降、②区の屋敷替えは9件あり、J2-A3が中村市右衛門から岡嶋家になったのをはじめ、J2-A7が石原拾郎から奈良家になるなど武家同士の変化がほとんどである。④区も同様に、武家同士の屋敷替えがほとんどであるが、林(J4-A2)と水戸(J4-A4)ら4家を除く13筆の居住者が替わっている。それ以外の区画もやはり安永4年以降、居住者が替わった屋敷地が多い。

3.8 慶応年間（図1-8）

文化8年以降、慶応年間(1865～67)までは屋敷割に変化はなく、③区と⑤区で合筆が2例ずつ、⑥区で分筆が1例あるだけである。

慶応までの屋敷替えは②～⑥区で11件みられるが、いずれも武家同士のものである。例えば、③区は西側のJ3-A2が久保家から大崎七太夫に替わったほか、東端のJ3-B7が再び合筆して飯田主税になっている。この他、④区のJ4-A1～A3の3筆が山田嘉平や竹沢真吉ら3士に替わり、⑤区のJ5-B2とJ5-B3がそれぞれ寺沢勘ノ助と岡田弥一郎になっている。一方、慶長以来、⑤区のJ5-A1にある町人地と貞享2年以降に町人地に変わった④区の3筆(J4-A3・A5とJ4-B10)は、慶応まで町人地のまま存続している。また、寛永期の忠昌入部時に⑥区の東端のJ6-E5に置かれた東光寺は、幕末までその位置は変わっていない。

4. 武家屋敷地の変遷

これまで述べてきた慶長18年～慶応までの城ノ橋の西側における武家屋敷地(②～⑥区)の合筆と分筆、屋敷替えおよび空き地の件数を時代ごとに示したものが表2である。

4.1 屋敷割

慶長18年以前の城ノ橋の西側における武家屋敷地は118筆で、区画別にみると、南端の⑥区が49筆で最も多く、次いで④区の26筆で、最小は⑤区の12筆であった。ところが、⑥区の西側一帯の屋敷地は空き地が20筆と多く、西端は河原や沼が広がっていた。

その後、万治2年の大火までに慶長期の河原や沼が改修されて屋敷割が多少変化しているが、⑤区以外で敷地数が減って100筆になる。特に③区と⑥区で合筆が多く、両区とも合筆して広くなった屋敷地は上級や中級武家屋敷になっている。

寛文9年の大火後～貞享2年の間に⑤区の西側にあった町人地の一部が武家屋敷地になった結果、武家屋敷地が増えて103筆になっている。その後は慶応までに合筆と分筆を繰り返しながら、慶応年間には113筆になっている。

表2 各時代の屋敷割と屋敷替え、空き地の件数

単位：筆

区画	年代	慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
②	屋敷割								
	合筆		3	0	0	0	0	0	0
	分筆		3	0	0	0	0	0	0
	屋敷地数	13	12	12	12	12	12	12	12
	屋敷替え		12	0	8	9	6	9	0
	変化なし		0	12	4	1	3	3	11
③	空き地	0	0	0	0	2	3	0	0
	屋敷割								
	合筆		4	0	0	0	0	0	1
	分筆		0	0	0	0	0	3	0
	屋敷地数	18	11	11	11	11	11	14	13
	屋敷替え		11	0	6	6	3	3	2
④	変化なし		0	8	5	3	0	0	11
	空き地	0	0	3	0	0	8	11	0
	屋敷割								
	合筆		3	0	0	1	0	1	0
	分筆		0	0	0	0	0	0	0
	屋敷地数	26	23	23	23	21	21	23	23
⑤	屋敷替え		20	1	14	14	14	13	3
	変化なし		0	18	7	5	2	4	18
	空き地	2	3	4	1	0	5	3	1
	屋敷割								
	合筆		0	0	0	0	0	0	1
	分筆		1	0	5	0	1	2	0
⑥	屋敷地数	12	13	13	21	21	22	24	23
	屋敷替え		13	0	16	13	8	4	2
	変化なし		0	11	3	8	3	5	19
	空き地	1	0	2	1	0	11	2	1
	屋敷割								
	合筆		7	2	3	0	0	1	0
⑦	分筆		1	1	2	1	3	1	1
	屋敷地数	49	41	40	36	37	40	40	42
	屋敷替え		38	1	20	22	18	20	4
	変化なし		2	30	11	15	14	11	36
	空き地	21	2	9	5	0	8	9	1
	屋敷数 合計	118	100	99	103	102	106	113	113
増減			-18	-1	4	-1	4	7	0

*1:付紙が剥がれた屋敷地は空き地を含む

*2:付紙が剥がれた屋敷地からの変化は空き地に含めた

4.2 屋敷替え

屋敷替えは、江戸時代を通して頻繁に行なわれている。特に慶長18年～万治2年の大火前の間が94件あって最多である。これは万治2年の絵図にみられる④区の栃谷(屋)半右衛門(J4-B8)や⑥区の糟谷傳右衛門(J6-B1)らは寛永元年に忠昌が3代藩主になった際、忠昌とともに越後高田から福井へ移住している。さらに⑥区の東光寺(J6-E5)も同様に、忠昌が越後高田から移築させた寺院である。一方、⑤区の鯉九郎右衛門(J5-B4)や⑥区の須崎三郎右衛門(J6-C1)は忠昌が越前入国後に召し抱えられた家臣である¹⁶⁾。したがって、城ノ橋の西側の武家屋敷地は寛永期に大規模な屋敷替えがあったと判断できる。

その後、屋敷替えは寛文9年の大火後～貞享2年にかけて⑤区にあった町人地の一部が武家屋敷地になるものや、逆に正徳4年以降に④区の武家屋敷地が町人地になる例もある。それ以降は貞享2年～正徳4年の一時期、④区に地方地が1筆存在している。但し、地方地は安永4年までに再び武家屋敷地に戻っている。それ以外は、幕末までの各時期に屋敷地の半数近くの屋敷替えが行なわれているが、これらはすべて武家同士の屋敷替えである。

5. おわりに

以上のように、城ノ橋の西側は慶長期に柴田時代からの町人地を残して屋敷割され、町人地の一部が幕末まで存続していること、慶長18年以降、区画の南西端に出丸としての役割を兼ねた上級武家の屋敷地が配されたこと、万治2年の大火前までに屋敷割された状態のまま、幕末まで踏襲していること、屋敷替えは寛永元年の忠昌の入部直後が特に激しかったこと、江戸時代を通して大部分の屋敷地が武家屋敷であったことなどが指摘できる。

これに対して、前稿で報告した城ノ橋の北側や東側の屋敷地は、貞享3年の大法と享保6年以降の松岡藩士の移入の2度大きな変化が認められる。そして、貞享3年～享保6年の間に、武家屋敷地の大半が地方地に替わったことも他に類例はない。したがって、城ノ橋の西側と東側の屋敷地では大きな違いが窺える。

ところで、城ノ橋一帯の武家屋敷地は藩の動向によって変動が著しかったと伝えられているが、その状況は北側と東側の屋敷地に限ったことで、西側の屋敷地に関しては江戸時代を通して大きな変化はみられなかったことを今回明らかにした。

[注]

- 1) 8枚の城下絵図はすべて、松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管。
- 2) 伊豆蔵庫喜・吉田純一「城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 その1」日本建築学会北陸支部研究報告集 56号, 2013, 投稿中
- 3) 矢守一彦『城下町のかたち』筑摩書房, p33, 1988
- 4) 貞享3年に福井藩は25万石に半知されている。その際、1000人余の藩士が禄を失い、福井城下の武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- 5) 享保6年(1721)12月、松岡藩主昌平が宗昌と改名して福井藩を相続し9代藩主となった。その結果、福井藩は松岡藩5万石を併合して30万石となり、松岡藩士も昌平とともに福井城下へ移り住んでいる。
- 6) 前掲3と同じ
- 7) 下中邦彦編『福井県の地名』平凡社, p251, 1981
- 8) 江戸時代の区割は、通りに面する両側を基準に区割されるのが通例であるが、今回は筆者の便宜上、現代の区割の方法(通りと通りの間の区画)で整理した。
- 9) 図2の屋敷地の境界線は慶長18年以前の『北之庄城郭図』の屋敷割をもとに書き起こしているが、坪数に関しては絵図に記されている「表・ウラ」の間数で算定している。
- 10) 前掲7と同じ
- 11) 鷹匠衆と餌指衆の屋敷替えに関しては、拙稿「鷹匠町における武家屋敷地の変遷」日本建築学会北陸支部研究報告集 54号, pp541-544, 2011.7ならびに「餌刺町と竹ノ鼻における武家屋敷地の変遷」同 55号, pp557-560, 2012.7で詳しく報告している。
- 12) 前掲7と同じ
- 13) 福井県立図書館 福井県郷土誌懇談会共編『続片叢記(上)』福井県立図書館, pp. 505-507, 1955.3 加藤宋月の項に「先四方へ堤を築置四五年之間度々之出水に砂壤流し込余程溜候節、土砂を為持屋敷にいたし候由、(中略)此所を屋敷に取立被申は、第一愛宕山より見渡に御城之側此方漸く二側斗に而以之外薄く相見へ、其上上方より寄来る勢ははる大橋へ廻る者は有間敷候、川を渡り真直に可参事に候、然は出丸なくては不叶所也とて取立申」とある。
- 14) 福井県立図書館 福井県郷土誌懇談会共編『国事叢記(上)』福井県立図書館 福井県郷土誌懇談会共刊, p109, 1961.3, 高田より東光寺を移建するの項 参照
- 15) 伊豆蔵庫喜・吉田純一「福井城下の武家地の研究 8～21」日本建築学会大会梗概集 F-2(2010～2012), 同北陸支部研究報告集(50号～55号), 福井工業大学研究紀要(37号～42号), 2007-2012 参照
- 16) 松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管、『諸士先祖之記(妙)』および『源秀康公御家中給帳』、『伊豫守忠昌公御代給帳』などを参考にしている。いずれの史料とも『福井市史 資料編4 近世二』福井市, pp. 184-399 所収, 1993.3

(平成25年3月31日受理)